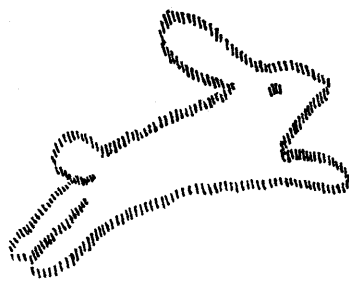


## 園児たちの家出

蕪木寿江



昨日が父親参観日だったので今日は代休……月曜日が  
おやすみなのも不思議な気がします。家の前を他の幼稚  
園のバスが行ったり来たりする中で、自分だけが異なっ  
た静止の世界にいるような感じがします。

小包みを作って郵便局に持って行こうと家を出まし  
た。サイクリングコースにかかっている橋を過ぎて狭い  
ガードレールにさしかかると、向うから水色のスモック

を着た三人の男の子が一列に歩いてくるのに出会いま  
した。

幼稚園の年長さんだな、とすぐに分りました。

「どうしたの？」と声をかけると、「家出してきたんだ  
よ」と三人が胸を張って答えました。

十時を十分過ぎていたでしょうか。不審そうな顔をし  
て見る私に家出してきたんだよ、O幼稚園はいじわるな  
んだよ、朝からワークブックばかりやって、僕がちょっ

と、ちょっとだよ、外で遊んでいたらお部屋の鍵をしめちゃったの」と、訴えるように話し続ける子ども達について、逆戻りをして一緒に歩きました。

「でもね、先生が心配しているから帰りましょうよ」

「あつたりまえでしょう、大人なんだもの——」

「……心配してるわよ、ね」

「帰らないよ、家出してきたんだもの」

時々うしろを振りむきながら話す子ども達の顔は、ますます輝いて見えました。

その幼稚園からここまでは三キロ余りあるところです。一時間はゆうに歩いています。その上まだ駅まで歩くというのです。駅までは二キロ近くあります。

駅にはお母さんが待っている、この道はいつも幼稚園バスが走るから分ることなど、代る代る話します。

「三人共同じ所なの？」

「ううん、この子はT駅なの」

「T幼稚園はいいんだよ、給食がなくてお弁当なの」

「O幼稚園なんか時間がいっぱいかかって、給食全部

食べないと許して貰えないんだもの、お弁当の方がずっといいよ、なあ——」

「ずっとはいよ、T幼稚園に行けばよかった」

この子が三人の中で一番ひ弱な感じがするのには、はっきりと主張するのです。

「ねえ、帰りましょう、先生が心配してるわ」

「だっておばさん、そう思わない、いじわるしたんだもの、家出したっていいでしょう」

背も高くがっちりしていて一番早い生れではないかと思う子が、堂々とした態度で言い切りました。

「でもね……ねえ、車で送って行って頂くからね」と、

丁度家の前まで来た時に、白い車がさーっと止まり、中からとんぼ眼鏡の若い先生が降りて来ました。

「先生の勤が当たったわ、もう出ちゃ駄目よ」と、ガッツポーズの片手をあげて、さっさと三人を車の中に入れました。

自信に満ちた子どもらしい表情が一瞬のうちに消えて、一言もしゃべらず黙って乗りました。

「受持の先生ですか、ご心配になったでしょう」と言うと、受持が気付くのが遅かったんで、私が車の運転ができるのでと、悪気もなく、子ども達に逢えた安堵の明るい口調でした。

「子どもの生活は遊びですから、沢山遊ばせて貰いなさい」これが精一杯の私の叫びでした。

車を見送りながら、「あの先生に、倉橋惣三選集をお貸しすればよかった、そうだ周郷博著作集もお渡しすればよかった」などと悔みながら、呆然として立ちすくんでいました。この先生は、私が幼稚園の先生だとは勿論思わなかったでしょう、今もご存知ないことでしょう。

「人間として生を受け、人間として死ぬることのできる人間の社会をつくっていく基礎である、土壌である、本当の幼児教育を求めて共に勉強していきませんか」と、その幼稚園宛に手紙を書くんだと興奮していましたが、実行しないままになっています。○幼稚園のバスを見る度に、あの三人がどこに乗っているかな、どんな顔して

るかな、と、ついつい背伸びをして覗きたくなってしまいます。

(神奈川県・市が尾幼稚園)

